

家事ハラという言葉から男性援助を考える

松本健輔 坊隆史

「この人に家事をお願いすると仕事倍になるんですよ。結局後から私がフォローしないとイケないです。やってもらうより、何もしないほうがましなんです。」

と妻が語る。

「先生、こういうの家事ハラっていうんですね」

と夫が返し問題はより悪化していく。

1、『妻の家事ハラ』とは

旭化成ホームズ株式会社の共働き家族研究所（2014）が、男女の家事シェアを促進するという趣旨で、『妻の家事ハラ』にフォーカスした意識調査をおこなっている。共働き家族研究所の定義によると、妻の家事ハラとは夫の家事協力に対する妻のダメだし行為を指す。（竹信三恵子氏の家事労働ハラスメントとは定義が異なります。）同研究所の結果では、子育て中の共働き夫婦における、夫の家事参加率は9割超を超え、その家事をする男性の実に約7割が妻の家事ハラを受けた経験があると回答している。

同研究所の調査によると、30代共働き夫婦では、25年間の調査で徐々に夫の家事参加の割合が増えていることが指摘されている。家事ハラはそんな時代だからこそ産まれた言葉と言える。そしてその言葉の裏には、慣れない家事労働をしている夫をもう少し上手く労いながら支えて行こうという妻へのメッセージが見え隠れする。

なお、『妻の家事ハラ』という言葉には議論の余地があると思われるが、本稿ではそもそもその是非を議論しない。夫婦の臨床の場でのこういった言葉の使われ方を議論するために敢えて使用する。

2、『妻の家事ハラ』という言葉が夫婦の現場でどう使われはじめているのか

共働き家族研究所がこの『妻からの家事ハラ』の結果を発表したのが2014年7月14日。そして、この原稿を書いているのが2014年11月20日。家事ハラをカウンセリングの中で耳にするケースがこの4ヶ月の間に実際何件かあった。前述の共働き家族研究所は、男女の家事シェアの促進を調査の趣旨にあげているが、著者の見ている夫婦臨床の現場では全く逆のことが起きている。

冒頭で紹介したある夫婦の会話と同様のケースを数多く見て来た。今まで家事に文句を言われて黙っていた夫は『妻の家事ハラ』という言葉を得て、これぞ好機とばかりに反撃に転じる。そこには、これで文句を言われなくなるという思いが背景にある場合が多い。しかし残念なことに、結果はさらに大きな文句が夫に降り注ぐことになるのだ。

3、「問題がある」という言葉を用いることで見えなくなるもの

「問題がある」「社会的に悪い」とレッテルが張られた言葉を用いる時に、見えなくなるものが確実に存在する。今回例に出した、『妻の家事ハラ』は、ハラメントという言葉を用いることで、攻撃の理由を作ってしまう可能性がある。夫が妻を攻撃する言葉になってしまうと、ただ悪口の1つでしかなくなってしまふ。そこで喧嘩が起こることで本来考えなければならないものが見えなくなってしまふ。

「妻は何が不満なのだろう」という大切なことが。

それは他の言葉にも言える。ドメスティックバイオレンスもモラルハラメントも同様だ。こういうことをしたら良くないことなんだということを世間に知らしめる意味で、ドメスティックバイオレンスやモラルハラメントという言葉にはとても社会的に意義のあると言える。ただ、その使い方を間違えると全く意味がなくなってしまふ。何がモラルハラメントなのかということで夫婦喧嘩をすることに何の意味があるのだろうか。本当に大切なことは「私は〇〇されるのが嫌だからやめて欲しい」ということだけなのだ。それが、モラルハラメントなんていう言葉で伝えようとするから、見えなくなってしまふの

だ。

4、男性援助の視点で考える

ここでももう少し突っ込んで、男性援助という枠組みで、『妻の家事ハラ』に代表される「問題である」という言葉の使い方について考えて行きたい。前述したように、夫婦の中で社会的に悪いこととされている言葉を使って相手に対して変化を強いることは結果的に失敗することが多い。しかし、それは社会という枠組みの中で考えたらどうであろうか。会社でデータを示し客観的なプレゼンテーションができることが1つの評価になり得る。たとえば、社会的にこういうことがセクハラになるとされているので、我が社の規定も同じようにしましよとプレゼンテーションすることはおかしな話ではないだろう。客観的データを用いて説明することに成功体験のある男性（時には女性の場合もあるが）にとって、家庭でも同じ手法で上手く行くと思うことは当然と言えば当然である。いったい誰が、家庭と仕事では同じやり方では上手くいかないと教えてくれるのだろうか。

著者は、夫婦カウンセリングの場で、妻に自分の正当性を証明する外的な資料を何枚も渡して説得した男性を何人も見てきた。彼らに取って正当性を主張するために、資料を用いて説明することは当たり前のことなのだ。今まで成功してきたことが、家庭では成功しないという難しさを共感することは援助を考える上で何よりも大切な土台となる。

冒頭で挙げた夫婦カウンセリングの一場面を思い出して欲しい。妻は夫の家事労働に対して激しく不満を怒りとしてぶつけている。このケースに関して言えば、夫は家事をととても頑張っていた。でも、妻の怒りは増すばかりだった。カウンセリングが進む中で妻の思いに丁寧に寄り添うことで、怒りの理由は家事への不満ではなかった。夫が自分への関心を示してくれないことが大きな理由だということが妻の口から語られた。夫は妻が喜んでくれると家事をしているのに、それを見た妻は私が怒ったから嫌々しているのではないかと思えばさらに怒りを強めてしまう。夫はさらに頑張り、時には無力感に陥る。さらに妻が追いつめる。結果、自分の頑張りを少しは認めて欲しいと、我慢の限界を超えた夫は『妻の家事ハラ』という言葉を使い反撃する。それに対して妻は責められているように感じさらに怒りを爆発させる。悪循環が発生していたのだ。彼、

彼女らの問題は『妻の家事ハラ』ではなく、お互いの愛情や関心をどう共有するかだったのだ。

夫はこのカウンセリングの中で、二つのことを学んだ。一つは妻の不満は言葉として語られるものがすべてではないということ。そしてもう一つは妻を説得するのに仕事でするように何かを引用して、説得しても意味がないということ。

男性援助を考える上で、上記のことはとても大切なことである。一見すると当たり前のことのようにみえるが、実践するのはとても難しい。その難しさを意識して援助していくことは、今後男性援助を考える上で大きな意義があるのではないだろうか。

引用文献

旭化成株式会社 (2014) 「妻の家事ハラ意識調査」
(<http://www.asahi-kasei.co.jp/hebel/kajihara/index.html/>) (2014年11月20日現在)